

令和2年度夏期企画展「島根にもいた！失われたゾウの世界」開催の記録

安 藤 誠 也*・遠 藤 大 介*, **(現所属)・田 中 宏 明*・大 谷 朗 子*

Report of the special exhibition "the lost elephant world"

Seiya Ando, Daisuke Endo, Hiroaki Tanaka and Akiko Otani

1. はじめに

当館では毎年、春期・夏期・冬期の年間3回の企画展を開催しており、この中で夏期企画展は最大の規模で実施されている。近年開催した幾つかの夏期企画展については今後の参考として残すために、担当者らによって三瓶自然館研究報告に事業報告などの形で纏められてきた（福岡ほか、2009；矢田ほか、2020）。

2020年の夏期企画展は「島根にもいた！失われたゾウの世界」というタイトルで開催した。島根県からはこれまでに少なくとも4種の化石長鼻類（以下、長鼻類のことを便宜的にゾウと表記する）が発見されている（廣田 1979；亀井 1990；赤木 1996）。これらは古いものから順に、ゴンフォテリウム類 (*Gomphotherium* sp.), ミエゾウ (*Stegodon miensis*), ナウマンゾウ (*Palaeoloxodon naumanni*), マンモス (*Mammuthus primigenius*) に同定されている。

これらは県内外の施設に保管されているが、島根県産ゾウ化石の全ての種を一同に公開する展示は行われていない。そこで本企画展では、島根にも地質時代にゾウがいたという事実を伝え、当時の環境を紹介する目的で開催した。本稿では展示の概要等を中心に報告する。

2. 企画展の概要

(1) タイトル

島根にもいた！失われたゾウの世界

(2) 趣旨

現在の日本には野生のゾウの仲間は1種類も生息していないが、地質時代に遡ると多くのゾウの仲間が生息していたことが化石によってわかっており、島根県でも陸地や海底から4種が化石として発見されている。日本は何度も大陸と地続きになり、その後に海によって隔てられた歴史があり、島嶼化したときに固有の種として進化したゾウも存在した。本企画展は、島根県産ゾウ化石を中心に、日本にいたゾウとその仲間である世界にいたゾウの歴史を化石によって振り返り、絶滅と進化の謎に迫った。

(3) 主催・共催

主 催 島根県立三瓶自然館 公益財団法人
しまね自然と環境財団

共 催 山陰中央新報社 中国新聞社

(4) 後援

島根県教育委員会、大田市教育委員会、NHK 松江放送局、読売新聞松江支局、毎日新聞松江支局、TSK さんいん中央テレビ、日本海テレビ、石見銀山テレビ放送株式会社、BSS 山陰放送、朝日新聞松江総局、島根日日新聞社、エフエム山陰、エフエムいずも

(5) 協力

三重県総合博物館、鳥取県立博物館、北海道博物館、島根県立古代出雲歴史博物館、大阪市立自然史博物館、倉敷市立自然史博物館、広島市安佐動物公園、野尻湖ナウマンゾウ博物館、島根大学総合理工学部地球科学科、島根大学総合博物館、近畿大学生物理工学部、近畿大学先端技術総合研究所、江津市教育委員会、野尻湖発掘調査団、一畑電気鉄道株式会社、林写真事務所、岡村喜明、近藤洋一、高橋啓一、樽野博幸、百原 新

* 島根県立三瓶自然館, 〒 694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahime), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

** 伊豆半島ジオパーク推進協議会, 〒 410-2416 静岡県伊豆市修善寺 838-1

Izu Peninsula Geopark Promotion Council, 838-1 Shuzenji, Izu City, Shizuoka 410-2416, Japan

(6) 会期

令和2年7月23日(木・祝日)~

令和2年9月27日(日) 開催日数63日

(7) 入館料

大人: 700円, 小中高校生: 200円

(8) 展示箇所

島根県立三瓶自然館本館1階受付前ホール・本館2階

回廊・別館2階企画展示室ほか

(9) 会期中の入館者数

35,317人(日平均入館者561人)

3. 展示内容

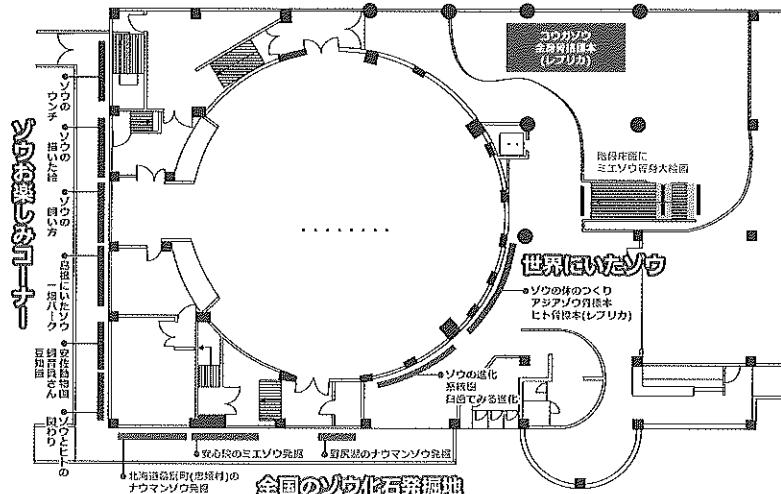
展示の配置を図1に示す。また主な展示物を一覧と

した付表を本稿の末尾に添付した。まず、入口付近の本館1階ホールではシンボル的な展示を行った。次に、ゾウがどのような動物かを知ることができるよう、現生のゾウの体のつくりや、進化の課程が分かる内容を配置した。その後、日本にいた化石ゾウに関する展示を行い、最後に島根にいた化石ゾウのコーナーを設置した。

(1) 本館1階ホール

当館の本館1階エントランスホールは、入館して最初に目に入る場所であり、シンボル展示として全長7.6m、体高3.8mのコウガゾウ (*Stegodon huanghoensis*) 全身復元骨格標本(レプリカ; 三重県総合博物館所蔵)を配置した(図2)。また、吹き抜けにはミエゾウの復元画タペストリー(長さ5.5m、幅5.2m; 三重県総合博物館所蔵、小田隆氏画)を吊下し

本館ホール～回廊



別館2階 企画展示室【島根にいたゾウ】

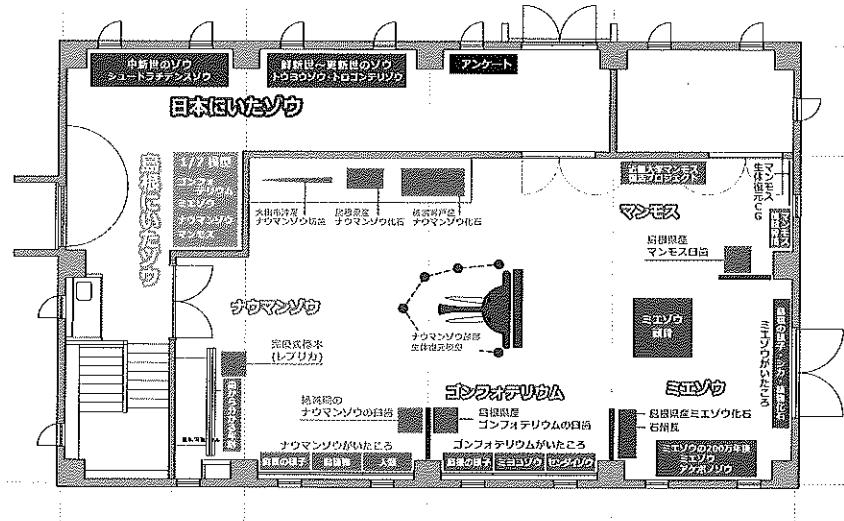


図1 展示物配置図

て展示した。コウガゾウは中国の黄河支流の近くで発見されたもので、日本には生息していなかったが、近縁種のミエゾウが日本に生息しており、島根県江津市からも顎や歯、牙の一部が見つかっている（赤木1996）。このため本企画展を象徴する標本として展示了した。



図2 コウガゾウ全身復元骨格

また、ミエゾウ復元画タペストリーは、今から約300万～400万年前の日本列島に暮らしていたミエゾウとその棲息環境を復元して描かれたものである。当時の日本にも現在の温帯に近い森林が広がり、その周りには草原や湿地、池などがあったと推定されている。復元画は化石でしか見つからない古生物や、過去の環境についてのイメージを来館者に直感的に伝える上で効果的であると考え、本展示に限らず企画展全体を通じて各所に配置して展示了。

(2) 本館2階サヒメルギャラリー

展示のテーマ -世界にいたゾウ-

このコーナーでは、現生のゾウの骨標本などを用いてゾウがどのような動物なのかを解説した後、その仲間の進化について系統樹や歯の化石を時系列に並べて展示了。

まず、現生のゾウのコーナーではアジアゾウの頭蓋骨、下頸骨、頸椎、胸椎、腰椎、上腕骨、前腕骨（大阪市立自然史博物館所蔵）を展示した（図3）。また、ヒトの同一部位の骨標本（レプリカ）と一緒に配置することで、来館者自身の骨格の大きさとゾウの骨格とを比較してもらえるように工夫した。

続いてゾウの仲間の進化を解説するための系統樹を壁面に配置した（図4）。この系統樹は中川（2014）を改変したもので、株式会社西尾製作所が作製した10種の現生・化石長鼻類の模型写真を生体のイメージとして掲載した。

次にゾウの歯化石（おもに臼歯）を6個展示し（図

5），これらと系統樹を対応させる形とした。まず、世界最古級の長鼻類と考えられているフォスファテリウム（三重県総合博物館所蔵），次にパレオマストドンとフィオミア（大阪市立自然史博物館所蔵），ゴンフォテリウム類（鳥取県立博物館所蔵），トリゴノセファルス（三重県総合博物館所蔵），最後に現生のアジアゾウ（鳥取県立博物館所蔵）の順で展示し、進化の段階で歯の形状が変化する様子を紹介した。



図3 アジアゾウとヒト(レプリカ)の骨標本



図4 ゾウの系統樹



図5 祖先系から進化系までの臼歯の比較

(3) 本館2階回廊（その1）

展示のテーマ - 全国のゾウ化石発掘地 -

ここでは、ナウマンゾウの発掘で有名な長野県信濃町の野尻湖（図6）、北海道忠類村（現幕別町）、ミエゾウの体幹・体肢の多くの部位が産出した大分県安心院町（図7）の各事例を取り上げた。これらの発掘地に共通するのは、発掘のきっかけとなった化石が研究者ではなく一般市民の手で発見されたことである。こうした事実を紹介することで、来場者に自分たちにもゾウ化石を発見出来る可能性があることを実感してもらえるような工夫をおこなった。



図6 ゾウの化石発掘地の紹介(長野県野尻湖)



図7 ゾウの化石発掘地の紹介(大分県安心院町)

(4) 本館2階回廊（その2）

展示のテーマ - お楽しみコーナー -

当館の企画展では、学芸員による専門的な内容を紹介する展示解説部分のほかに、関連展示として、来館者に近い目線で企画する雑学・体験・工作といった「お楽しみコーナー」を設置することがある。これは全職員を巻き込んで自由な発想で製作したものである。当館の立地する大田市に伝わる祭事のなかのゾウについて、県内でかつてゾウを飼っていた遊園地、ゾ

ウの描いた絵の展示、動物園でゾウの飼育員を取材した動画などを設置した（図8）。

また、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止策として、比較的短時間でできるもの、見て楽しむもの、消毒可能なものの3つに重点をおいた。そのため、毎年恒例であった記念撮影コーナーや10分程度の時間を要する工作コーナーについては、密を防ぐ点や消毒作業といった課題がクリアできず実施を取りやめた。リピーターからはもの足りなさを指摘する声もあったが、実施したものについては、いずれのコーナーも老若男女問わず反応が良く、来館者満足度の向上には一役買えたものと思われる。



図8 お楽しみコーナーの展示風景

(5) 別館2階企画展示室前ホール

展示のテーマ - 日本にいたゾウ -

このコーナーでは、かつての日本列島に生息したゾウとその進化について、代表的な化石を用いて展示・紹介をした（図9）。主な展示標本はシュードラチデンスゾウ (*Stegolophodon pseudolatidens*) やトウヨウゾウ (*Stegodon orientalis*) といったステゴドン類、マンモスの祖先であるトロゴンテリゾウ (*Mammuthus trogontherii*) の頭骨や下顎骨、臼歯を中心に時系列に沿って配置した。本コーナーでは、日本列島に出現するゾウの変遷を考える上で鍵となる、地質時代を通じてユーラシア大陸との間に繰り返し形成されてきた陸橋の存在とゾウの移動・進化との関連を紹介した。

また、化石標本と解説パネルに加えて、対応する古生物の生態復元画を展示した。ここで使用した復元画はすべて伊藤丙雄氏（東京工科大学）によるイラストである。古生物の生存時の姿を推定して描かれた復元画を展示した狙いは、化石や文章だけでは想像することが難しい体のつくりの特徴や体表面の様子などを、直感的かつわかりやすく伝えるためである。



図9 日本にいたゾウ

(6) 別館2階企画展示室

展示のテーマ - 島根にいたゾウ -

導入部分である企画展示室入り口前には、島根県内から産出したゴンフォテリウム類、ミエゾウ、ナウマンゾウ、マンモスの1/7模型（株式会社西尾製作所）を同縮尺のヒトのシルエットと一緒に展示し、大きさの比較を行った。また、亀井（1990）などを参考に島根県における長鼻類化石発見場所の地図も示した（図10）。



図10 島根県より産出している4種の模型(1/7サイズ)

企画展示室内には上述した4種ごとのコーナーを設けた。各コーナーに共通する事項としては、それぞれの種が生きていた環境が推定できる植物化石や動物化石と一緒に展示し、それと近い植生が現存する場所の風景写真（百原新氏より借用）を掲示した。

・ナウマンゾウ

島根県大田市沖からは、国内最大級の本種の左上顎切歯の化石が発見されているため、同化石を鳥取県立博物館より借用して展示した。さらに、この切歯の大きさから想定されるナウマンゾウの頭部生体復元模型（造形：近 洋二、監修：近藤洋一）をオリジナルで

製作し、展示室の目玉として中央に配置した。復元にあたっては温帯に生息した説を基に皮膚の露出した様子で再現した（図11）。また、島根県産のナウマンゾウ化石は全て海底より産出しているが、陸に生息したゾウが海から発見される理由について解説した。ここでは、備讃瀬戸地域の海底より産出したナウマンゾウの体幹・体肢、乳臼歯から大臼歯までの多くの実物資料（主に倉敷市立自然史博物館所蔵）も用いて、ナウマンゾウの骨格や成長過程などについて説明した（図12）。

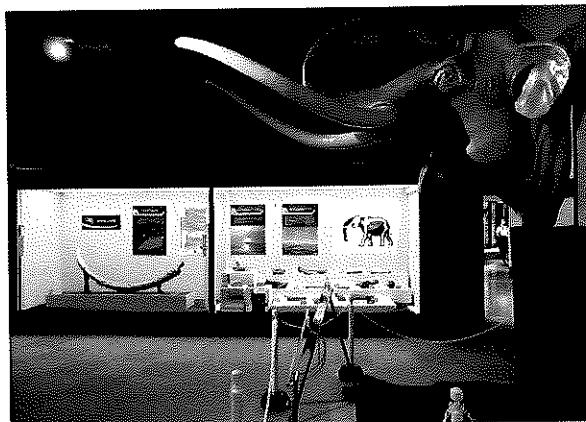


図11 ナウマンゾウ頭部生体復元模型



図12 ナウマンゾウの成長過程などに関する展示

・ゴンフォテリウム

1967年に簸川郡（現出雲市）湖陵町より地元の中学生が発見した臼歯の化石（島根大学総合理工学部地球環境科学科所蔵のレプリカ）を展示した。島根県から発見されたゴンフォテリウムは、この近心側を一陵欠損した臼歯のみであり、種の特定には至っていない。そのため、ゴンフォテリウム類という標記にとどめた（図13）。



図13 ゴンフォテリウム類

・ミエゾウ

島根県産のミエゾウの化石は江津市都野津町で石州瓦の原料となる陶土を含んだ鮮新統より、瓦製造業者によって発見され（赤木 1996），下顎骨・切歯片・臼歯片の化石（江津市都野津公民館所蔵）と一緒に石州瓦（当館所蔵）も配置した（図14）。また、ミエゾウが島嶼化した日本で生き残り、小型化していったことを伝えるため、その子孫とされるアケボノゾウの頭骨模

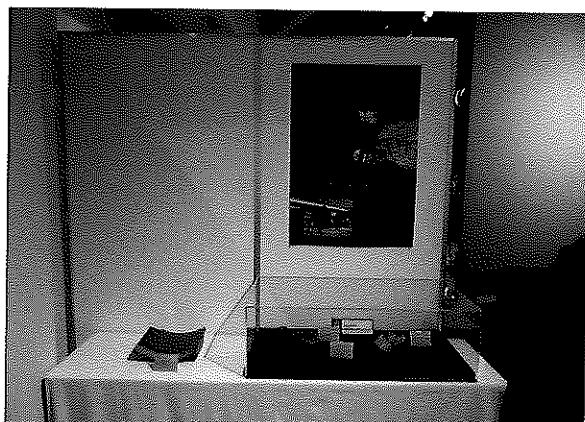


図14 島根県産ミエゾウ化石と石州瓦



図15 ミエゾウとアケボノゾウの体サイズの比較

型（大阪市立自然史博物館所蔵のレプリカ）や大腿骨（三重県総合博物館所蔵）を展示した（図15）。

・マンモス

島根県沖の日本海海底からは本州地域からは唯一となるマンモスの臼歯化石（鳥取県立博物館所蔵）が発見されており、これを展示した（図16）。この化石は $23,630 \pm 880$ 年前のものとされ、中国大陸等にいたものが死後海流によって運ばれ堆積したと推定されている（亀井 1990）。



図16 日本海底産マンモス臼歯など

また、このコーナーでは大型ドーム用に制作された番組「アイスエイジ」（2013年にジャイアントスクリーンフィルムズ、D3Dシネマ制作）を約2分間の動画に編集することで、マンモスの生体CGを投影し、生存時の姿を彷彿させる内容とした。

さらにコーナーの終わりでは、近畿大学生物理工学部、近畿大学先端技術総合研究所の協力を得て、遺伝子工学によってマンモスを復活させようとする取組についての紹介を行った。

4. 広報活動

おもな広報活動としては、中国地方全域の公共施設や観光施設等へのポスター掲示やチラシ配布（図17）、新聞・各種広報誌への情報掲載やコラム等の寄稿、県内ケーブルテレビ全局での特集番組放送や地上派CMのほか、SNSを活用した広報などを展開した。概要是表1に示したとおりである。

本年は、4月16日の当館リニューアルオープン周知を目的に、島根県によるテレビやラジオでの番組やCM、雑誌記事での紹介や広島市の街頭ビジョンでの放映等の広報活動が年度当初から実施され、この中に本企画展の告知も含まれた。しかし、新型コロナウイ

ルス感染症拡大に伴う県の対応方針に準じ、休館期間を5月末まで延長することとなり、広報計画が一時中断した。このため、チラシ配布を取り止めたほか、予定していた告知の機会を一部失うこととなった。その

後、6月より開館し、未実施分は本企画展の開幕直前に行われた。

館単独としては、5月の大型連休の集客を見据え、プレチラシの配布、館内プレ展示等の準備を進めてい



図17 チラシの表面(左)、裏面(右)

表1 広報活動の概要

媒体区分	広報媒体	広報先および内容、掲載・放送日	発行部数・放送回数
ポスター	ポスター	主に中国地方全域（道の駅、博物館、図書館、公民館、観光施設等）	700部
チラシ	チラシ	上記に加え、松江市・出雲市内へのポスティング、大田市内への新聞折込等	63,000部
新聞	中国新聞社	共催による特別広告、紹介記事掲載等	広告：16回 記事：4回
	山陰中央新報社	〃	広告：4回 記事：5回
	読売新聞	広告、紹介記事掲載等	広告：21回 記事：1回
	島根日日新聞	広告、紹介記事掲載、情報誌広告掲載	広告：1回 記事：2回 情報誌：100,000部
テレビ(地上波)	広島ホームテレビ	スポットCM、番組紹介等（7月10日～9月27日）	27回
	広島テレビ	〃	19回
	TSK 山陰中央テレビ	〃	33回
	山陰放送	〃	25回
	日本海テレビ	〃	23回
テレビ(ケーブル)	山陰ケーブルビジョン	松江市、安来市内へのスポットCM（8月1日～9月21日）	345回
	出雲ケーブルビジョン	出雲市内へのスポットCMおよびニュース（8月1日～9月21日）	213回
	石見銀山テレビ	大田市内へのスポットCMおよびニュース（7月25日～9月26日） 中国地方全ケーブルテレビ局での制作番組放送（9月1日～9月30日）	CM：1,191回 番組：1,060回
	石見ケーブルビジョン	江津市、浜田市内へのスポットCMおよびニュース（8月1日～9月26日）	321回
WEB	三瓶自然館HP	公式HPトップバナーおよびイベント情報欄での紹介	—
	三瓶自然館Facebook	公式アカウントでの広告掲載（8月1日～8月30日）	表示数：178,615回 閲覧数：62,719回
	三瓶自然館Twitter	公式アカウントでのツイート（随時）	
その他刊行物など	イベントカレンダー（年間）	島根県内の小・中学校、博物館、図書館、公民館、観光施設等	45,000部
	ニュースレター（隔月）	年館パスポート会員、県内の小中学校、図書館、市町村等	3,000部

*島根県による地上波テレビ、ラジオ、街頭ビジョン等による広報が上記と別に実施された。

たが上述した理由によってこれらは中止となった。6月の開館以降は広島県、島根県を中心に、各媒体による情報発信を行った。特に比重を置いた地上派CMにおいては、予告篇と開幕篇の2種類の動画を制作し、約2ヶ月間放送した。また、当館初の試みとなったFacebook広告では、20~40代ユーザーの反応が最も良好であり、期間中394件のフォローワー数を獲得した。

5. 関連イベント

企画展に関連するイベントとして次の4事業を実施した。

(1) 講演会「今のゾウ、昔のゾウ」

- ・期日：7月25日（土）13:00~14:30
- ・場所：別館1階レクチャールーム
- ・講師：広島市安佐動物公園
飼育・展示課 川上 裕敏氏
- ・内容：広島市安佐動物公園の飼育員を招致し、現生のゾウの体の仕組みや生態について紹介した。また、講演会の後には、当館学芸員が太古のゾウについて展示室でギャラリートークを行った（図18）。
- ・参加者数：29名（定員親子10組・事前予約制）



図18 講演会「今のゾウ、昔のゾウ」

(2) 講演会「近畿大学のマンモス復活プロジェクト」

- ・期日：8月1日（土）13:00~15:30
- ・場所：別館1階レクチャールーム
- ・講師：松本和也氏（近畿大学先端技術総合研究所所長）、加藤博巳氏（近畿大学先端技術総合研究所 教授）
- ・内容：近畿大学の進めている「マンモス復活プロジェクト」について、研究の中心メンバーである2名の教授を招いて実施した講演会。イベント前半はプロジェクトの経緯やシベリア

でのマンモス化石の発掘、体細胞クローニングの培養実験や、将来展望などをスライドで紹介した。後半は参加者それぞれの口腔上皮細胞からDNAを抽出する実習を行った（図19）。

- ・参加者数：33名（定員30名・事前予約制）

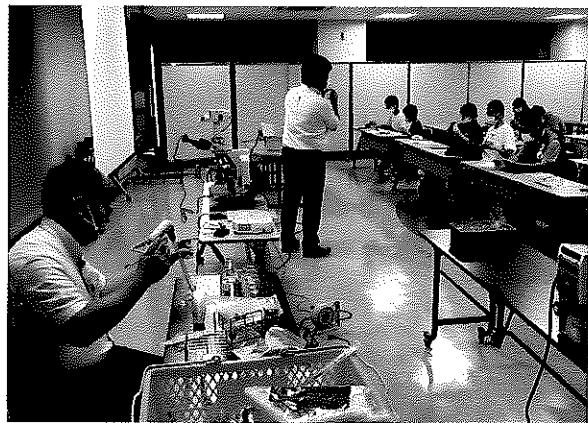


図19 講演会「近畿大学のマンモス復活プロジェクト」

(3) 化石発掘体験

- ・期日：8月22日（土）13:00~14:30
- ・場所：三瓶山北の原旧フィールドセンター1階
- ・内容：化石を含む岩石（出雲市多伎町、大田市仁摩町）をハンマーで割って、中から二枚貝や植物などの化石を探す体験型の講座。見つけた化石は図鑑を使って種の同定をおこない、標本ラベルを付けて参加者に持ち帰らせた（図20）。

- ・参加者数：14名（定員10名・事前予約制）



図20 イベント「化石発掘体験」

(4) 一日クラフトまつり

- ・期日：9月13日（日）10:00~15:00

- ・場所：別館1階レクチャールーム
- ・内容：自由参加で、ゾウなどの動物をモチーフとした作品作りや、化石や石をテーマにした工作を楽しむイベントで終日開催とした。この中では、ナウマンゾウの足跡を模した団扇づくり、厚紙で作るゾウの折り紙、樹脂で作るアンモナイトのレプリカ作り、小石に色を塗つて形を作るストーンアートの4ブースの出展があった。各ブースのアイディア出し、運営はボランティアスタッフの協力を得て実施した。
- ・参加者数：123名（親子連れなど31組・当日申込）

6. アンケートの結果

今回の企画展では、目的の達成度の確認や展示の改善などを目指して来館者アンケートを実施した。企画展の大きな目的は、タイトルにもあるとおり「かつて島根県にもゾウが暮らしていた事実を知ってもらうこと」や、「ゾウや共産する植物などの化石資料から過去の島根県・日本の環境に思いを巡らせ、化石や郷土の地史に興味を持つてもらうこと」である。アンケート調査は、企画展示室内に解答用紙と筆記用具、回収箱を設置して自由に回答してもらう方法で実施した。会期中に388枚の回答があった。結果を図21に示す。

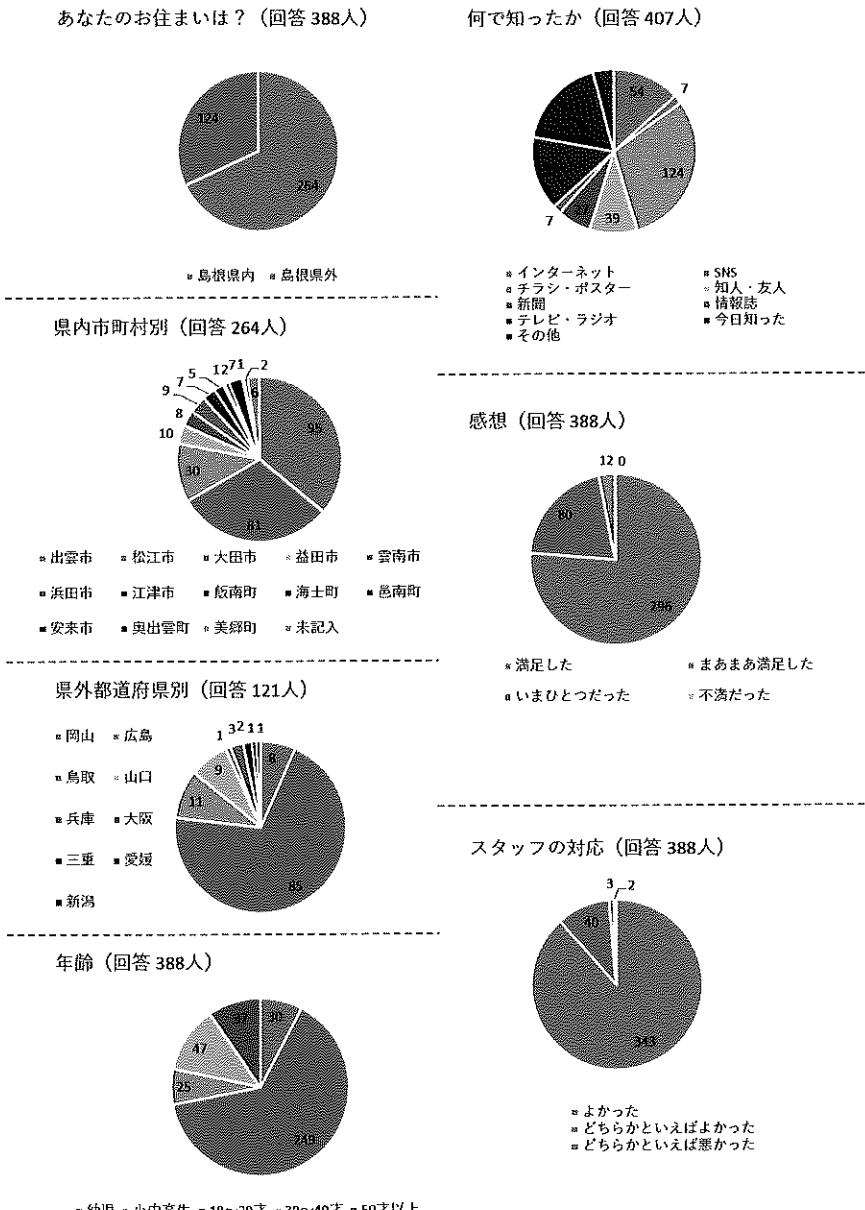


図21 アンケート結果

(1) 回答者の属性

回答者のおよそ70%が島根県内からの来館者であった。当館の2018年までの年間来館者層（龍, 2018）や過去の夏期企画展（福岡ほか, 2009；遠藤ほか, 2020）の結果を見ると、県内からの来館者の割合はおよそ40%から60%程度であり、これら過去のデータと比べて県内客の割合が高かった。この理由として新型コロナウイルスの流行による行動制限や外出自粛の影響が考えられ、こうした傾向は今後しばらく（新型コロナウイルス終息まで）は続くと予想される。また、県外客の内訳では90%以上が中国地方からの来館者であった。これについては過去の夏期企画展の傾向と比べても大きな変化は見られなかった。

回答者の年齢層では小中高生が60%強を占めていたものの、その他はほぼ均等に幅広い年齢から回答を得ることができた。過去の夏期企画展でも同様の結果が得られており、これまでどおり当館が対象としている集客層に訴求できたことが示された。

(2) 企画展の情報源

企画展の情報源はチラシ・ポスターがおよそ30%と最も高く、この傾向は過去の夏期企画展でもほぼ同様の結果が見られている。当館企画展の広報手段においては、チラシやポスターは変わらず重要なツールであるといえる。続いてテレビ・ラジオといったメディアとインターネットがそれぞれ15%で、知人・友人や新聞が各10数%程度という結果となった。これらのデータを過去のものと比較すると、インターネットから情報を得て来館する人の割合は2008年では4%にとどまっていたのが、2018年には12%、今回は15%と上昇傾向にあることがわかった。この傾向は今後も一層進むと予想されるため、SNSやウェブ広告等を活用した広報戦略にも力を入れていく必要があると考えられる。

また、今回特徴的だったこととして、テレビ・ラジオから情報を得た人の割合が高かったことが挙げられる。テレビ・ラジオの割合は2008年には4%、2018年には6%であったが、今回は15%と急上昇した。この原因の一つとして考えられるのが、ケーブルテレビや民放CMを視聴している県内客の割合が高かったことが影響しているだろう。新聞広告や掲載コラム記事などを見て来館した人の割合は2008年、2018年ともに8%であり、今回も大きな変化はなかった。つまり、新聞は広報手段としては大きな柱とまではいかないまでも、常に一定の来館者を得るのに有効であるといえる。

(3) 展示内容

今回の企画展の内容に対する満足度は非常に高く、「満足した」または「まあまあ満足した」と回答した人の割合を合わせると95%以上となった。過去の夏期企画展の結果と比べても、ほぼ同程度の高い満足度を達成することができた。コロナ禍での企画展開催となり、相対的に県内からの来館者が多かった点でも“島根”に特質した内容に興味を持った方が多かったかも知れない。

自由記述の意見を見ていくと、「楽しかった」「良かった」といった肯定的な感想・意見が多数あり、「島根との関わりに焦点が当ててあって面白かったです」や「島根の海にマンモスの化石があったなんて夢が広がります」、「最新の研究に基づくナウマンゾウの再現像を見られたのも良かった」などの意見から、企画展で意図した目的をおおむね達成することができたと感じている。一方で、「島根がテーマだけにギャートルズの絵を使ってほしかった」とか、「コウガゾウの骨格標本のような子供の目を引くものがもう少しあればいいと思った」といった、内容への改善や物足りなさを指摘する意見も見られた。こうした意見の中には、当初の企画・構想段階では案が挙がっていたものの、実施・設計の段階で削ったり変更したりしたために実現できなかったものも含まれている。具体的には、ヘラジカやジャコウウシといった大型動物のはく製を展示し、部分的な骨化石が多い単調な展示に変化を持たせることを考えたが、輸送にかかる予算や展示室の空間的な制約により実現できなかった。

7. まとめ

本企画展の会期は新型コロナウイルス感染症拡大に伴う休館期間の延長により、当初計画に対し5日間短縮となった。また、ビジュアルドームや天体観察会などの利用制限による施設の魅力低下は否めず、そのうえ各家庭の出控えや全国的な夏休みの短縮などが集客に大きく影響した。このように厳しい状況下での開催となつたが、本企画展の総入館者数は前年度夏期特別企画展に対し85.8%となった。これにはリニューアルオープンの告知も含め、県と連動した広報活動の効果もあったと考えられる。

さらに、当館の企画展では、毎回様々なスタッフから意見を募集して工作やハンズオンによる体験展示を企画・実施してきたが、今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止を第一優先に考え、不特定多数の人の手に触れたり、除菌・消毒の難しい素材を使ったりするのを控えた。その結果、例年のような企画を期待して

来館した人には一部不満を感じさせてしまった可能性がある。今後はウィズコロナ・アフターコロナの生活様式に合わせて、満足度を保つ工夫を考えていかなければならぬ。また、アンケート結果のなかには、ギャラリートークの開催希望など、感染症予防の観点から実施出来なかったイベントもあった。こうした意見も来年度以降の展示やイベントを計画する際の参考としたい。

謝 辞

本企画展を開催するにあたり、展示物の借用、展示方法のアドバイスなどで以下の機関・団体・個人のご協力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

三重県総合博物館、鳥取県立博物館、北海道博物館、島根県立古代出雲歴史博物館、大阪市立自然史博物館、倉敷市立自然史博物館、広島市安佐動物公園、野尻湖ナウマンゾウ博物館、島根大学総合理工学部地球科学科、島根大学総合博物館、近畿大学生物理工学部、近畿大学先端技術総合研究所、江津市教育委員会、野尻湖発掘調査団、一畑電気鉄道株式会社、林写真事務所、岡村喜明、近藤洋一、高橋啓一、樽野博幸、百原 新

引 用 文 献

- 赤木三郎（1996）山陰の第四紀地質研究事始め覚書。島根大学地球資源環境学研究報告、15, PP.9-16.
- 福岡 孝・矢田猛士・河野重範・井上雅仁・帶刀公平・太田哲朗・龍 善暢・星野由美子・中村唯史・大國陽子・石田幸代・安原 豊子（2009）2008年夏期企画展「大化石展」の舞台裏。島根県立三瓶自然館研究報告、7, PP.131-147.
- 廣田清治（1979）島根県産脊椎動物化石目録。化石研究会会誌、12, PP.21-27.
- 亀井節夫（1990）日本海と象。第四紀研究、29 (3), PP.163-172.
- 中川良平（2014）三重県総合博物館 開館記念企画展第3弾「でかいぞミエゾウ！～化石が語る巨大ゾウの世界～」。三重県総合博物館, p.107.
- 矢田猛士・安藤誠也・山本めぐ美・竹下瑠美（2020）令和元年度夏期特別企画展「ボーっと眺めてたら叱られる！今こそ知りたい月のなぞ」実施報告。島根県立三瓶自然館研究報告、18, PP.151-160.

付表(1/2) 主な展示物一覧

所蔵機関:M(三重県総合博物館), T(鳥取県立博物館), O(大阪市立自然史博物館), K(倉敷市立自然史博物館), SU(島根大学), G(江津市教育委員会), SM(島根県立三瓶自然館)

展示場所	番号	資料名	種別	産地	時代	所蔵
本館1階ホール (導入)	1	コウガゾウ全身骨格	レプリカ	中国	新第三紀鮮新世	M
	2	ミエゾウ復元画タペストリー	絵画	—	新第三紀鮮新世	M
本館2階ギャラリー	3	アジアゾウ(ミドリ)頭骨	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
世界にいたゾウ	4	アジアゾウ(ミドリ)下顎骨	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
	5	アジアゾウ(ミドリ)第2頸椎	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
	6	アジアゾウ(ミドリ)第2胸椎	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
	7	アジアゾウ(ミドリ)第3腰椎	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
	8	アジアゾウ(ミドリ)右前肢 上腕骨	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
	9	アジアゾウ(ミドリ)右前肢 尺骨	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
	10	アジアゾウ(ミドリ)右前肢 桡骨	実物	南海電鉄みさき公園飼育個体	現生	O
	11	フォスファテリウム右下顎	実物	モロッコ	古第三紀晩新世中後期	M
	12	バレオマストドン 右下顎第3大臼歯	レプリカ	エジプト	古第三紀始新世から漸新世	O
	13	フィオミア 右下顎第3大臼歯	レプリカ	エジプト	古第三紀始新世から漸新世	O
	14	ゴンフォテリウム 白歯	実物	アメリカ合衆国フロリダ州	新第三紀中新世から鮮新世	T
	15	トリゴノセラルスゾウ右下顎第2大臼歯	実物	インドネシア ジャワ島	第四紀更新世	M
	16	アジアゾウ 白歯	実物	鳥取県内動物園飼育個体	現生	T
別館2階企画展示室前ホール	17	シュードラチデンスゾウ 頭蓋骨	レプリカ	宮城県船岡町	新第三紀中新世前期	O
日本にいたゾウ	18	シュードラチデンスゾウ 下顎骨	レプリカ	宮城県船岡町	新第三紀中新世前期	O
	19	シュードラチデンスゾウ 下顎骨	レプリカ	福島県いわき市	新第三紀中新世前期	O
	20	トヨウゾウ 下顎骨(脊骨)	レプリカ	滋賀県大津市	第四紀更新世中期	O
	21	トヨウゾウ 頭骨	実物	大阪府枚方市	第四紀更新世中期	O
	22	トヨウゾウ 左下顎第3大臼歯付下顎骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世中期	K
	23	サイ科 右とう骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	24	トロゴンテリゾウ 下顎骨	実物	クロアチア ザグレブ近郊	第四紀更新世前期	O
別館2階企画展示室島根にいた4種	25	センダイゾウ(ゴンフォテリウム)	1/7模型	—	新第三紀中新世から鮮新世	SM
	26	ミエゾウ	1/7模型	—	新第三紀鮮新世	SM
	27	ナウマンゾウ	1/7模型	—	第四紀更新世後期	SM
	28	マンモス	1/7模型	—	第四紀更新世から完新世前期	SM
別館2階企画展示室島根にいたゾウ	29	ナウマンゾウ 頭部生体復元模型	実物大模型	—	第四紀更新世後期	SM
(ナウマンゾウ)	30	ナウマンゾウ 右下顎第3乳臼歯、第4乳臼歯付下顎骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	31	ナウマンゾウ 左下顎第3乳臼歯	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	32	ナウマンゾウ 左下顎第1大臼歯	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	33	ナウマンゾウ 左下顎第2大臼歯	実物	大分県国東郡海底	第四紀更新世後期	SM
	34	ナウマンゾウ 左下顎第3大臼歯	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	35	ナウマンゾウ 完模式標本(下顎)	レプリカ	静岡県浜松市	第四紀更新世後期	O
	36	ナウマンゾウ 白歯	実物	島根県沖の海底	第四紀更新世後期	SU
	37	ナウマンゾウ 左切歯	実物	島根県大田市沖の海底	第四紀更新世後期	T
	38	ナウマンゾウ 右上顎第三大臼歯	実物	島根県沖の海底	第四紀更新世後期	T
	39	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右脛骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	40	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右上腕骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	41	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 寛椎(第1頭椎)	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	42	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右蹠骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	43	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右脛骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	44	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 左寛骨(腸骨、坐骨)	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	45	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 胸椎(棘突起)	実物	瀬戸内海海底	新第三紀鮮新世から第四紀更新世	K
	46	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右第3または4肋骨	実物	瀬戸内海海底	新第三紀鮮新世から第四紀更新世	K
	47	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右尺骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	48	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右踵骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	49	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右大腿骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	50	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右大腿骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	51	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 右肩甲骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	52	ナウマンゾウまたはトヨウゾウ 大腿骨(骨頭)	実物	瀬戸内海海底	第四紀中期更新世～後期更新世	K
	53	ステゴドン 白歯	実物	島根県沖の海底	新第三紀鮮新世	T
	54	ニホンムカシジカ 右落角	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	55	カズサジカ 左落角	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	56	グレイ氏カトウキヨマサジカ 右落角	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	57	ヤベオオツノジカ 中手骨	実物	岐阜県郡上市	第四紀更新世後期	O
	58	ヤベオオツノジカ 右角主幹柱状部～分枝部	レプリカ	岐阜県郡上市	第四紀更新世後期	O
	59	トラ 左第5中手骨	実物	岐阜県郡上市	第四紀更新世後期	O
	60	スイギュウ属 右上顎骨	実物	瀬戸内海海底	第四紀更新世後期	K
	61	ネアンデルタル人(頭骨・下顎骨)	レプリカ	フランス	第四紀更新世中期から更新世後期	SM
	62	クロマニヨン人(頭骨・下顎骨)	レプリカ	フランス	第四紀更新世後期	SM
	63	ナウマンゾウ 右上顎第3乳臼歯	実物	岐阜県郡上市	第四紀更新世後期	O

令和2年度夏期企画展「島根にもいた！失われたゾウの世界」開催の記録

付表(2/2) 主な展示物一覧

所蔵機関:M(三重県総合博物館), T(鳥取県立博物館), O(大阪市立自然史博物館), K(倉敷市立自然史博物館), SU(島根大学), G(江津市教育委員会), SM(島根県立三瓶自然館)

展示場所	番号	資料名	種別	産地	時代	所蔵
別館2階企画展示室	64	ゴンフォテリウムの一種	レプリカ	島根県出雲市	新第三紀中新世から鮮新世	SU
島根にいたゾウ (ゴンフォテリウム)	65	ミヨコゾウ 左下顎第3大臼歯	レプリカ	宮城県柴田郡柴田町	新第三紀中新世から鮮新世	O
	66	センダイゾウ 右上顎第3大臼歯	レプリカ	宮城県仙台市	新第三紀中新世から鮮新世	O
	67	センダイゾウ 右下顎第3大臼歯	レプリカ	宮城県仙台市	新第三紀中新世から鮮新世	O
	68	ヤナギ属の1種	実物	鳥取県八頭郡佐治村辰巳岬	新第三紀中新世後期(柄原累層)	SM
	69	ムカシブナ	実物	鳥取県八頭郡佐治村辰巳岬	新第三紀中新世後期(柄原累層)	SM
	70	アニアイフジキ	実物	鳥取県八頭郡佐治村辰巳岬	新第三紀中新世後期(柄原累層)	SM
	71	サンズガワアオダモ	実物	鳥取県八頭郡佐治村辰巳岬	新第三紀中新世後期(柄原累層)	SM
別館2階企画展示室	72	ミエゾウ都野津標本(切齒片)	実物	島根県江津市	新第三紀鮮新世	G
島根にいたゾウ (ミエゾウ)	73	ミエゾウ都野津標本(右下顎骨)	実物	島根県江津市	新第三紀鮮新世	G
	74	ミエゾウ都野津標本(臼齒片)	実物	島根県江津市	新第三紀鮮新世	G
	75	ミエゾウ左大腿骨(骨頭)	実物	三重県津市	新第三紀鮮新世	M
	76	ミエゾウ左大腿骨(骨体)	実物	三重県津市	新第三紀鮮新世	M
	77	ミエゾウ左下顎臼歯	実物	三重県津市	新第三紀鮮新世	M
	78	ミエゾウ(シンシュウゾウ) 頭骨	レプリカ	長野県長野市	新第三紀鮮新世	M
	79	ミエゾウ(シンシュウゾウ) 頭骨	レプリカ	長野県長野市	新第三紀鮮新世	O
	80	ミエゾウ(シンシュウゾウ) 頭骨	レプリカ	長野県長野市	新第三紀鮮新世	O
	81	アケボノゾウ 頭蓋骨レプリカ	レプリカ	兵庫県明石市沖海底	第四紀更新世前期	O
	82	アケボノゾウ右大腿骨	実物	三重県いなべ市	第四紀更新世前期	M
	83	アケボノゾウ下顎骨	レプリカ	三重県いなべ市	第四紀更新世前期	M
	84	シカ属(下顎骨)	実物	島根県江津市	新第三紀鮮新世	G
	85	ヒシの実	実物	浜田市大金町	第四紀更新世(都野津層)	SM
	86	マツ科	実物	江津市浅利町	第四紀更新世(都野津層)	SM
	87	ムカシブナ	実物	不明	第四紀更新世(都野津層)	SM
	88	メタセコイア	実物	江津市	第四紀更新世(都野津層)	SM
	89	石州瓦	実物	—	第四紀更新世	SM
別館2階企画展示室	90	マンモス 左下顎第三大臼歯	実物	島根県沖の海底	第四紀更新世から完新世前期	T
島根にいたゾウ (マンモス)	91	マンモス 左脛骨	レプリカ	ウクライナ	第四紀更新世から完新世前期	T
	92	マンモス 左大腿骨	レプリカ	ウクライナ	第四紀更新世から完新世前期	T